

残留日本兵の歴史知って

敗戦後、インドネシア独立戦争戦う

第2次大戦時に日本が占領したインドネシアに駐留し、敗戦後も現地に残った残留日本兵の子孫らで作る組織「福祉友の会」が、残留日本兵の歴史を学べる資料館の開設に向けた活動を始めた。日系2世、3世らが交流できる場にもする構想で、ヘル・サントソ衛藤会長(60)は「日本との懸け橋にしていきたい」と意気込んでいる。

仮称「インドネシア残留日本兵資料館」は、インドネシアが20カ国・地域首脳会議(G20サミット)の議長国となる予定の2022年に合わせ、同年中の開設を目指す。残留日本兵関連の本や写真、証



インドネシア残留日本兵資料館設立への思いを語る日系2世のヘル・サントソ衛藤会長。11月17日、ジャカルタ

資料館の22年開設目指す

子孫ら「両国の懸け橋に」

言映像、インドネシア政府から授与された勳章などの資料だけでなく、子孫の日系人や日本人が交流できるラウンジも併設。日系人子弟の日本留学や日系企業就職を支援する機能も持たせたいとしている。

ジャカルタ南部で会が一部を事務所として使っている建物を改装し、新施設として整備する計画。日本とインドネシアの個人から寄付金を募る方針だ。

会作成の名簿によると、残留日本兵は903人。うち約6割がオランダからの独立戦争をインドネシア人と共に戦う中で死亡したり行方不明になったりした。

生き残った残留日本兵も生活基盤の確立に苦労し、その一人がジャカルタで貧困の中で孤独死したことをきっかけに1979年、会が発足した。

当初は残留日本兵の相互扶助組織として医療費援助や会報発行を続けていたが、200人以上いた生存者は高齢化で年々減り、2014年に最後の一人だった小野盛さん(北海道出身)が亡くなった。

日系2世のヘルさんが資料館創設を思い立ったのは今年9月ごろ。残留日本兵がいなくなった中、会の活動を活発にし「復活させた」との気持ちからだった。

ヘルさんによると、残留日本兵の子孫は少なくとも4千人に上るとみられる。スマトラ島の憲兵だった父・七男さん(03年死去、大分県出身)は「戦争体験をほとんどしゃべらなかつた」が、神戸商科大(現・兵庫県立大)に留学させてくれ、日本語を習得できた。

現在パナソニックの現地子会社幹部を務めるヘルさんは、3世、4世が日本語をほとんど話せなくなっている現状に危機感を覚えている。「資料館を日系人のアイデンティティー確立の場所にし、日本からの観光客が訪れる施設にしていきたい」と語った。

(ジャカルタ共同)



インドネシア独立戦争 日本敗戦の2日後の1945年8月17日、旧オランダ領東インドでスカルノ(初代大統領)らが独立を宣言。これを認めない連合国側やオランダとの間で独立戦争が約4年間続いた。

インドネシア国軍には残留日本兵も加わり、旧日本軍の武器や弾薬も使ってゲリラ戦を展開。ジャワ島東部には残留日本兵で編成された特別遊撃部隊もあった。オランダは国際的圧力の中、外交協議で49年12月に主権を正式に移譲し、終戦した。(ジャカルタ共同)